

第1章 登場大統領への手紙

フレンズの作戦会議

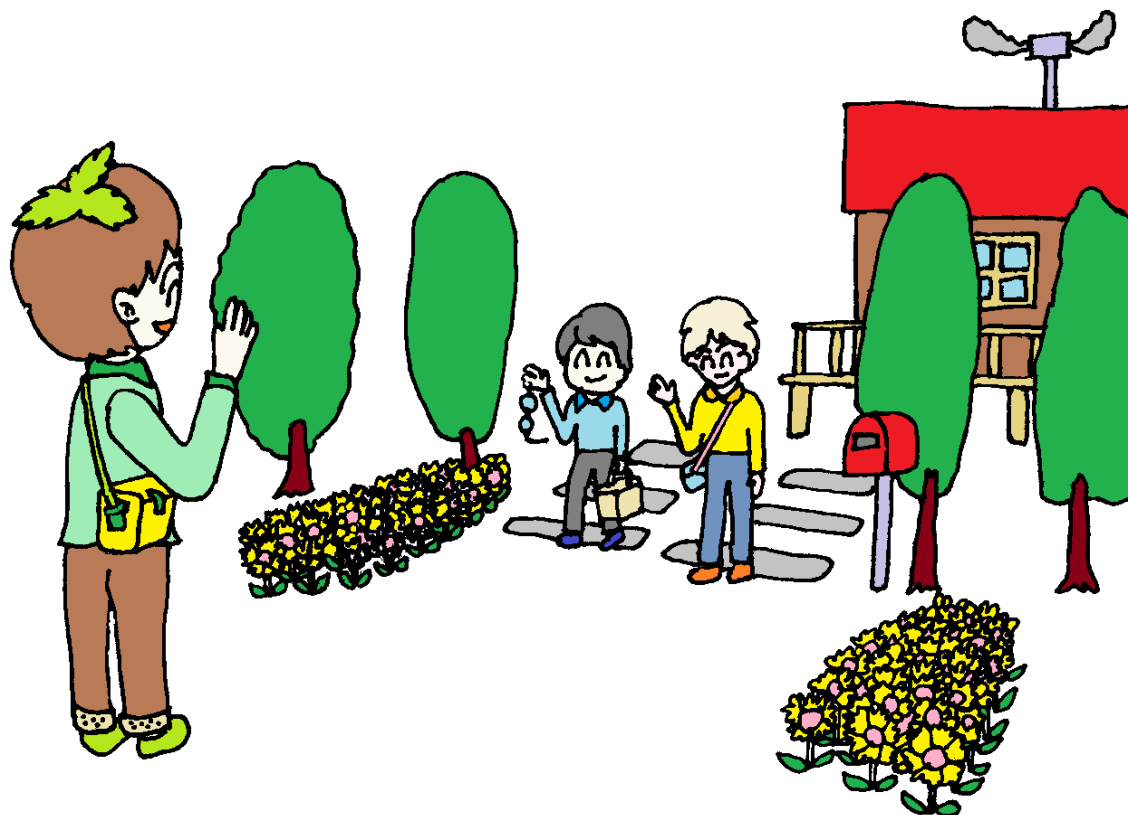
6月にはいった始めの日の金曜日は、まだ臨時休校が続いています。朝、エイミーはいつものように、アンおばあさんと朝早く一番遠い段々畑に出かけました。黄色いトマトの花がいっぱい咲いている季節ですが今年はまばらです。

「それにしても花が少ないねえ」

エイミーは、アンおばあさんに向かって言いました。

「ほんとうだよ。よそでは実がなるところもあるけど、しぼんじまうっていうしね」

市場へも行かれないため、アンおばあさんは畑でいつものように作



業をし、エイミーは家に帰ることにしました。

「エイミー」

前の方から横に大きく両手を振って、トミーが叫んでいます。

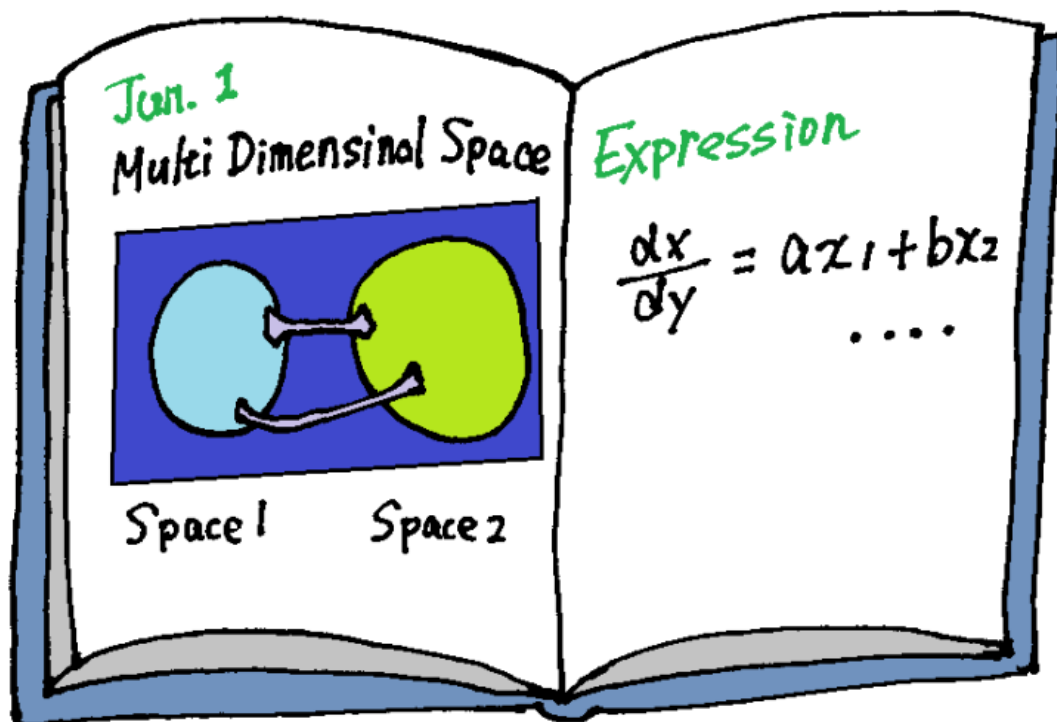
「トミー！家に来てたの？バーバラも？」

「まだ早いけど、最近レタ君のおかげで早起きなんだ」

「だってみんなお陽さまと行動が同じなんだもん。夕方暗くなると寝ちゃうし・・・」

まだ朝の6時ですが今は6月です。お陽さまはとっくの昔に空高く昇っています。

「とうとう今日は学校閉鎖だね。だから来たんだけど、うちのクラスは今は誰も休んでいないのにな。おいら休みより学校の方がいい



な・・・なんて思ったりして」

「どうしたのトミー、そんな心境の変化、気持ち悪いわね」

「だって休校だけど今日も早起きしてあの本を見ていたんだ。そうしたら文字が書いてあったよ」

「なんて書いてあったの」

エイミーが感心した顔でたずねました。

「マロン村の次元トンネルだけでなく他にも小さなトンネルがいっぱいできているそうだよ。早く負のエネルギーを消さないとどんどん大きくなるんだ」

「大きくなるとどうなるの？」

今度はバーバラがたずねました。

「それをおいらが今計算しているんだ。その式は、ほらここだよ」

そう言ってトミーはその本をエイミーとバーバラに開いて見せました。

「ずいぶんと文字が埋まっていきたじゃない」

エイミーが言いました。

「そうだよ。この式が解ければレタ君の助けになるはずなんだ」

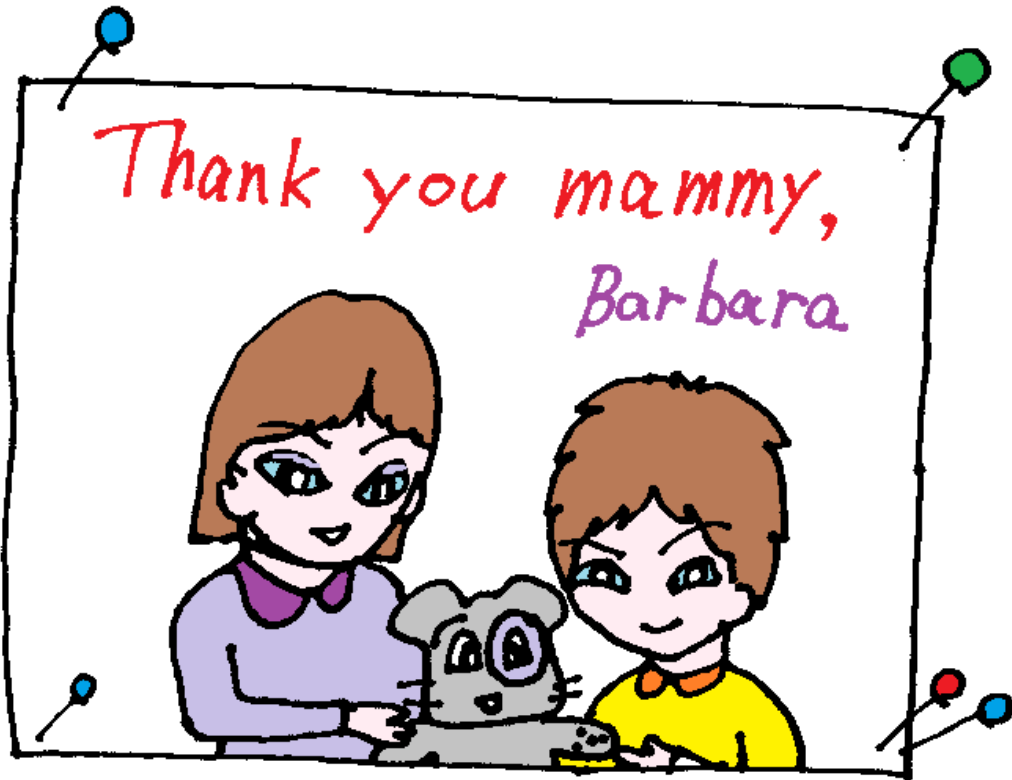
「すごいわねトミー。お礼にパンツの帽子をもらおうといいわね」

「・・・べえっ・・・」

「実はエイミー、わたしもなんだけど、だんだんあの筆が使えるようになってきたのよ。絵を何枚も描いたらママがそれ欲しいって」

「それもすごいことね、バーバラ」

「絵を見てると仕事の疲れがとれるそうよ」



「じゃあバーバラもそれをトナさんにあげてパンツもらったら」

『やあグッドモーニングだにやあ！』

「だれ？・・・クラウシアさん」

『おはよ～～まっただ二』

「レタ君！」

『おっは一、みなさん』

「トナさんにデコさん！」

「どうしたのみんな頭にデカパンかぶって・・・」

「バ、バーバラ、ぼ、帽子でしょ・・・」

「そ、そう・・・み、みんな素敵な帽子で・・・ど、どうしたのかしら・・・？」

「どこかで買ってきたのかい」

『あのゴミと交換したニ』

「ゴミってお金のことかしら？」

『エイミーの言ったように役に立ったわね』

「そ、そう・・・。そ、それはよかったわ」



それぞれデザインは違うものの縦じまのデカパンをどこかで買って来たらしいのです。それを自慢げにかぶっています。

「それでどこへ行っていたの？ちょっと出かけるって言って月曜日から4日間もいなかったわね」

フレンズはいつも太陽が沈む夜の7時くらいには寝てしまうものの、エイミーが帰るころはトナもデコもレタも畑で何かやっています。

『愛ジーのところへ行ってきたのよ』

「トナさん、アイジーって？」

『アイムシュタイン所長デコ』

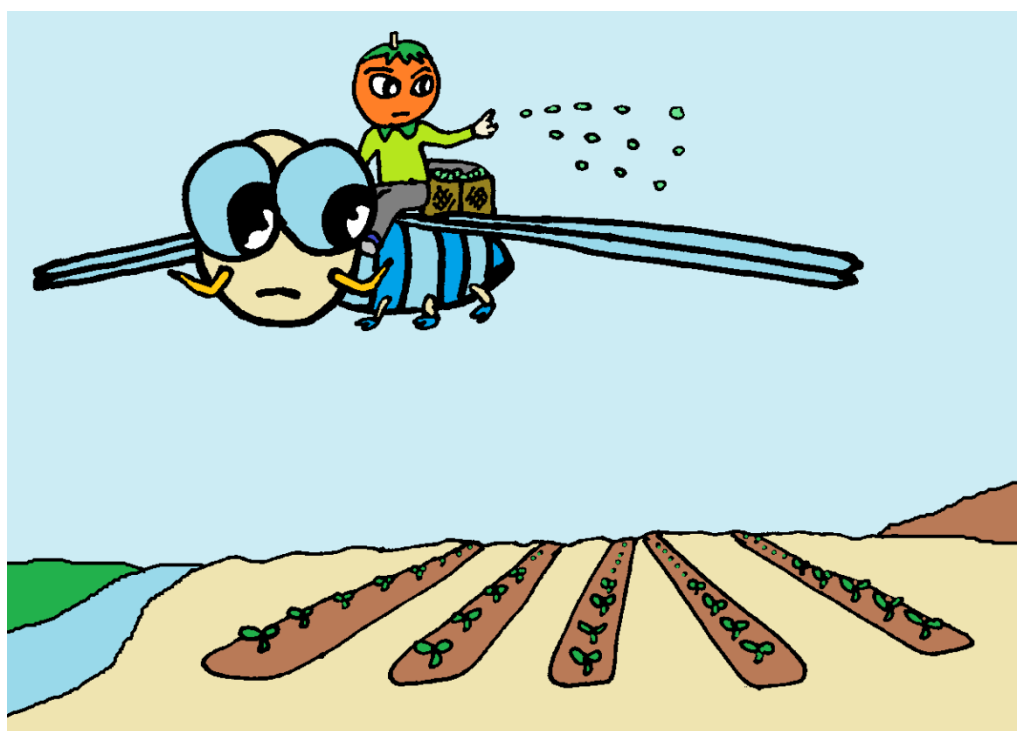
「デコさん、アイジーっていうの？」

『Tシャツに【愛 (AI)】って描いてあったからにやあ』

「なんでも好きにした方がいいかもね。で、そこでなにしていたの」

『ボクにゃんが言ったことを実現するためさ』

「なにを言ったんだったっけ～～？」



『トミー、わすれちゃったの？スピリアンを捲くっていったにやあ』

「あっ、そうだった、そうだった。ごめん、ごめん」

『空軍に言ってスピリアンを捲いてもらうにゃあ』

「そのために大統領を説得するのね」

『オラッチのバイオコンピューターも売るニ。しこたま儲けるだニ』

「またそのパン・・・、いや、ぼ、帽子を買うのかしら？」

バーバラがたずねました。

『オラッチ、【畑の野菜大図鑑】という聖書をみつけたニ』

『【野のお花辞典】という宝石の本もあったトナ』

『【かんきつ類大百科】というペットの本がほしいポン』

「・・・・・・・・その、大統領なんかかっていったい何の事？」

「で、バーバラ、トミー、こういうことなのよ」

エイミーは、先週の夜の出来事を話しました。

「だ、だいどうりょうに会おう～～～？」

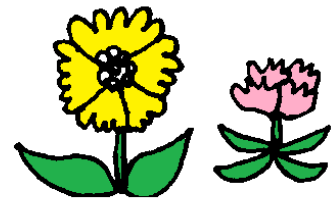
「お、おいらもいっしょにかい？」

「そう。あたしたち3人で会うのよ」

「だ、だってえ～～～」

「それがトナさんもレタさんもだいじょうぶだからって・・・」

『こころの木があるからよ』



「ト、トナさん、ど、どうして」

『こころの木はそれを持っている人に同期するって言ったでしょ。
大統領もシンクロするわよ、きっと』

『あなたたちだけでできるわデコ』

『オラッチの【畑の野菜大図鑑】という聖書をプレゼントに持って
行くかニ?』

「フレンズにはそういうのが聖書なの
ね、バーバラ・・・」

「お花が宝石なのね、エイミー・・・」

レタは、3人に具体的な方法などの説明
を始めました。



『大統領はこの病気の流行を恐れているニ。大流行しないかとニ。そこで我々
がとっておきのプレゼントをする』



「とっておきのプレゼントがこころの木?」

3人はお互いの顔を見合って、いいました。

『病気を治すには、こころの木を使うニ』

「こ、こころの木!」

おもわずトミーが少し大きな声を上げました。

『そう、こころの木だニ』

『こころの木はヒューマニワールドにはないわ。これを使うと病
気は治せるわ』

『それだけでは足りないから効果を上げるためにスピリアンもまくにやあ』

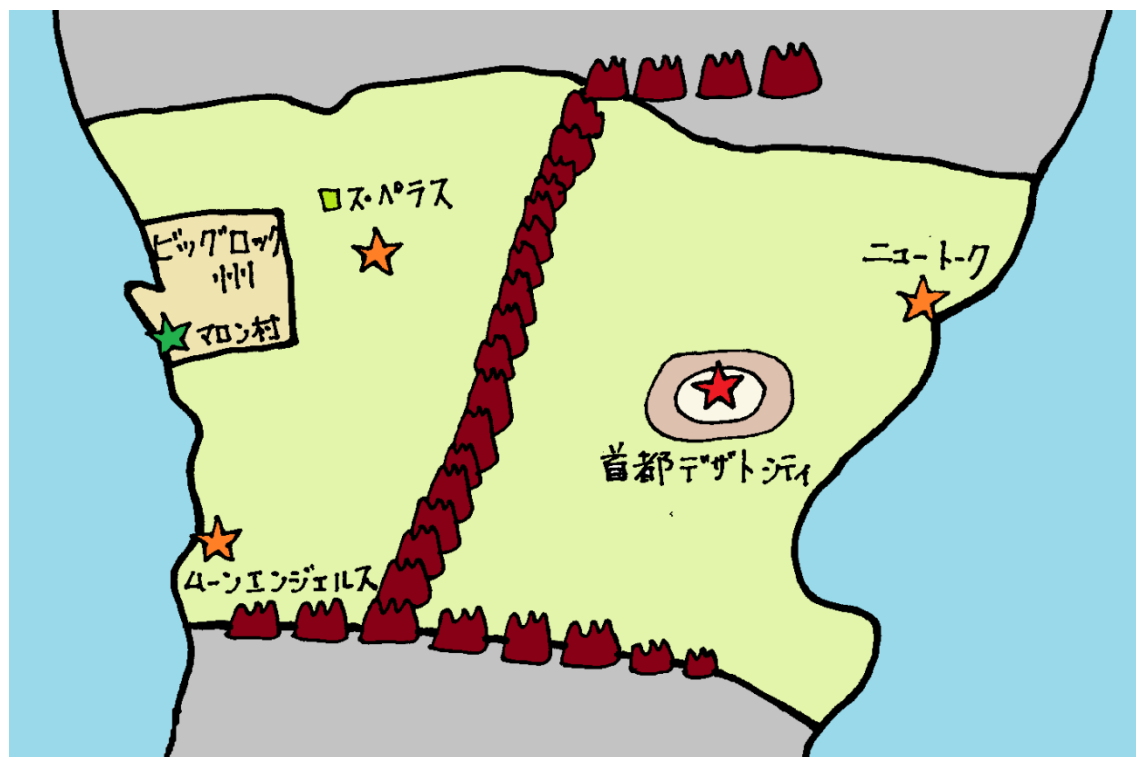
「クラウシア君、スイカの帽子も売るんだよね。おいらのトマトとゴキちゃんの帽子も人気が出てきたよ」

「たいへんだけどこの方法しかないのかな、バーバラ？」

エイミーはそう思いました。しかしみんなはこの時、まだ戦闘機の墜落事件のことは知りませんでした。

異変の拡大

病気はマロン村やその周辺の村々と同じように、首都デザト・シティ、東のニュー・トーク、西のムーン・エンジェルス、中央のロス・ペラスなど全国にも拡大してきました。



マロン村での病気の発生から、わずか10日たらずの速さです。大統領府通称イエローパレスの特別対策本部では、軍関係者だけでな

く医師、科学者などの知識人と、外交政治に強い官僚が呼び集められていました。病気は不名誉なことにマロン村シンドロームと名づけられてしまいました。1人が状況を説明しました。

【現在の状況】

1. 病気発生場所と日時

初めの病気の発生はブルーグラウンド州（州都ビッグ・ロックシティ）のブルーリバーシティに近いマロン村で10日前に発生した。今では合衆国全体に広がっている。

2. 症状

発熱、セキ、発疹など風邪に似るが、数日で改善するが気力が落ちる。いまだ改善報告なし。

3. 患者数

子供 20 数万人

大人 数千人

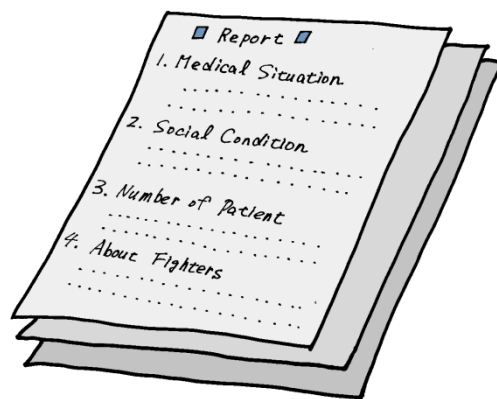
4. 戦闘機墜落の件

墜落戦闘機数 6 機、民間機はなし

5. 病気の原因

ウィルスでなく、花粉のような物質と推定されている。

6. 戦闘機墜落と病気の関係



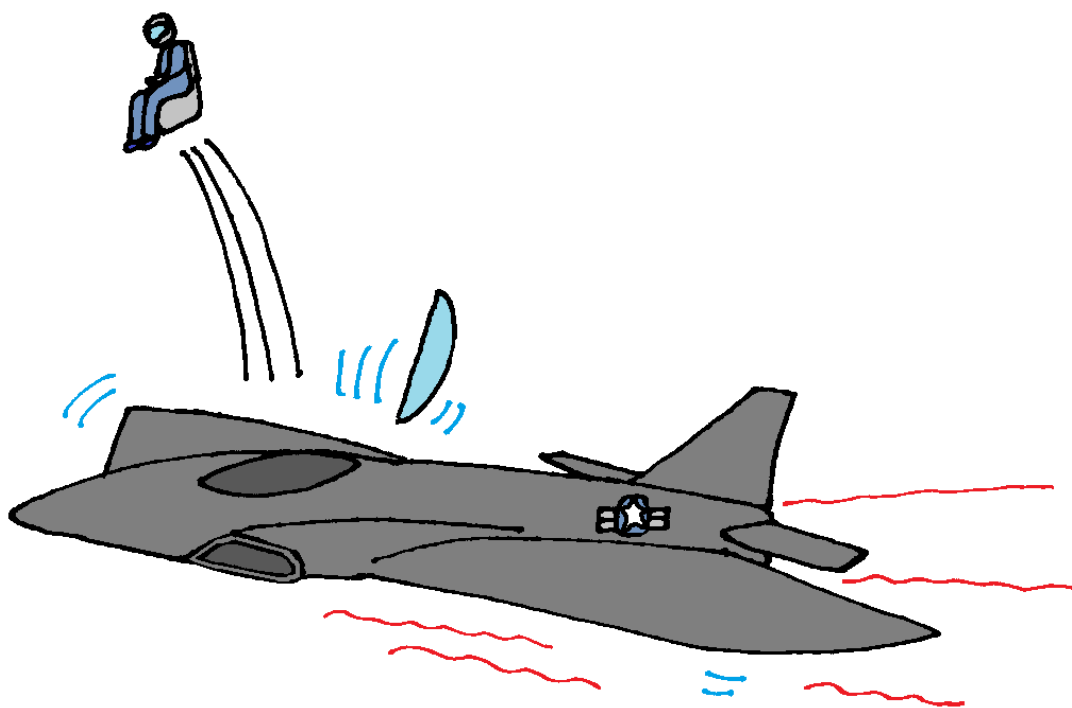
因果関係はつかめていない。おそらく無関係だろうと推測する。

7. その他

軍需スパイがマロン村などに現れ情報を収集しているので注意。

そこへあわただしく補佐官が入ってきて、特別対策本部長を兼ねているカナディ大統領に耳打ちしました。

「なんてことだ！また2機墜落した！これで8機目だ」



皆も一様にざわめいています。

「民間機はだいじょうぶか？」

誰かがいいました。

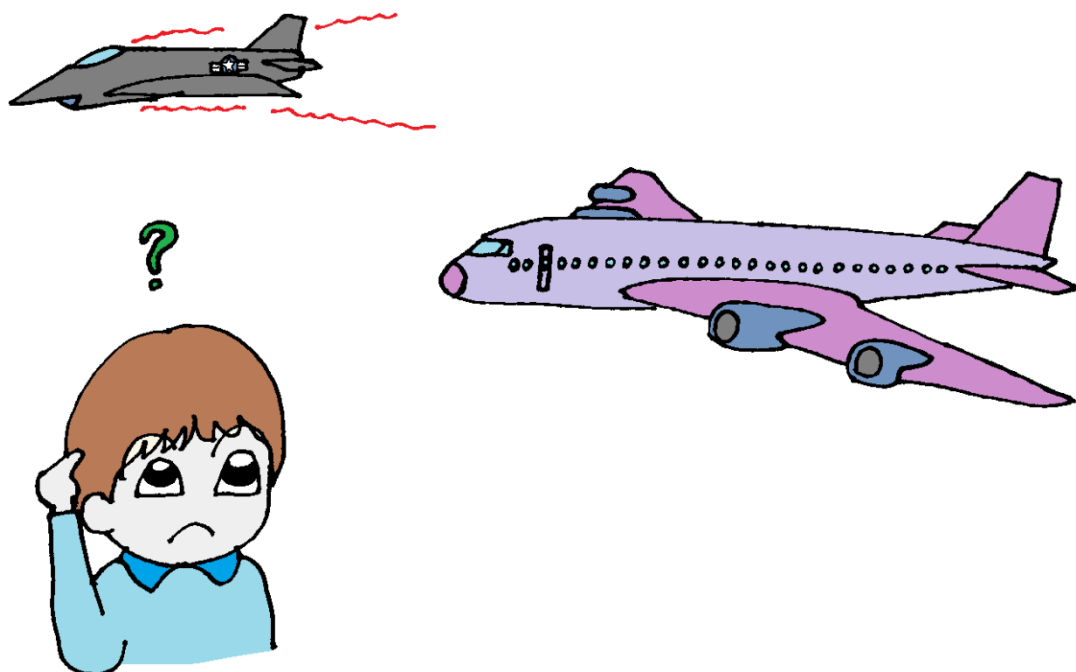
「また戦闘機です」

補佐官が話しました。

「わたしは科学者として、こんな発言では恥ずかしいのですが……」

沈黙の中、1人の科学者が重い口を開きました。

「実は昨日、幼稚園の孫とこの話をしてて、なぜ速い戦闘機がやられるんだよ、というのです。遅い飛行機は大丈夫なのによって」



「それが何か関係するのでしょうか？」

補佐官がいます。

「つばめは高速で飛んで狩りをします。遅いと逆にできません。戦闘機の墜落は、何か速度に、関係しているのではないかと……」

その科学者がいいました。

「それはあまりにも短絡的な言い方だ。われわれもデータを集めて、科学的に分析している。そんな幼稚園児の言葉なんかに……」

「おっしゃる通りです。失言でした。この分析項目に速度がなかった
ので、つい……。いやほんとうに失礼しました」

発言した科学者は、ばつが悪そうに椅子に座りました。

「しかし、それは調べてみる必要があるな」

それを聞いていた大統領が突然、発言に加わりました。

「だ、大統領、あなたまで……」

科学チームの責任教授が、びっくりしていいました。

「戦闘機の墜落寸前の速度と、光る物体とのデーターを、もう一度
洗いなおしてくれ。今すぐにだ」

大統領は、その責任教授に命令しました。

「わ、わかりました。すぐにデーターを確認します」

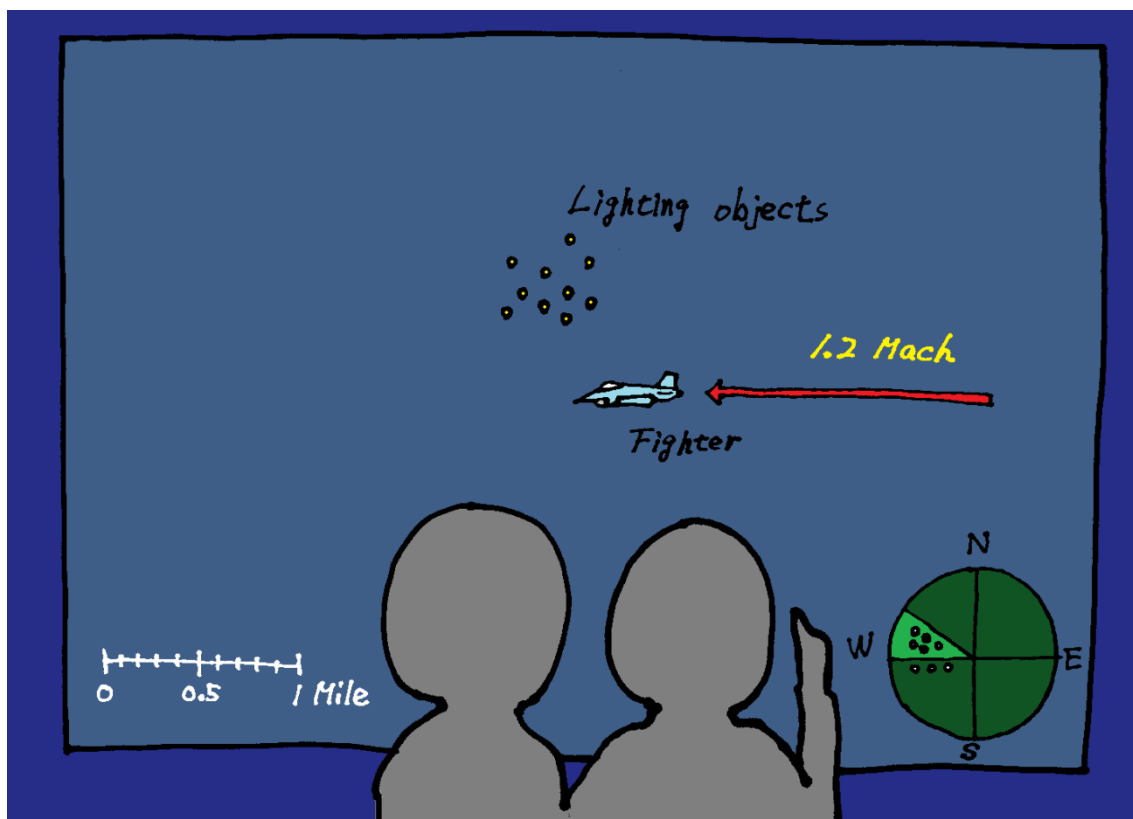
一刻の猶予もありません。アシスタントの科学者が、パソコンをデ
ーターセンターにつなぎ、すぐ速度との関係を計算しました。スー
パーコンピュータを使っても、30分くらいかかります。一同は少
し休息を取ることにしました。

飛行機に異変が

30分以上が経過し、結果が執務室の大きなディスプレイに表示され
ました。そこには墜落する戦闘機がシミュレーションされていまし
た。

「ほ、ほんとうに、その子供のいう通りかもしれない。なんてこと
だ、君、大変失礼なことをいった。許してくれたまえ」

責任教授は発言した科学者に謝りました。シミュレーションでは、高速で移動する物体に、光る筋が接触する様子を映し出していました。



「と、とんでもありません。わたしこそ出すぎたことを……。それでどんな結果なのでしょうか？」

「みなさん、これをご覧ください。ここで戦闘機は毎時 1,800 キロの音速を超えて飛んでいる。それに光の軌跡を合わせて行くと、毎時 1,600 キロあたりから、同期してくるようだ」

責任教授は、さらに 2、3 度、パソコンを操作し、何度もシミュレーションしました。みな、映し出される大型ディスプレイに目を見張っています。戦闘機が右から左に移動していきます。突然画面中央部に光が現れ、戦闘機に斜めに向かって、ほぼ直進して接触しま

す。そして戦闘機は光の塊のようになり、制御不能なキリモミ状態で落下していきます。

「この時は毎時 1,800 キロですな」

「お、おそろしい最新兵器のようですな」

参謀総長が椅子から立って、ディスプレイに近づきいいました。

「これは雷などの自然現象とは考えられません。どこかの国が開発した最新兵器の、実験ではないでしょうか」

「しかし、そんな報告は一度も聞いていませんが」

空軍参謀が発言しました。

「じゃあ、どうこの動きを説明できるのかね。少なくともわが国ではないぞ。そんなのは・・・で、武器である確率は？」

参謀総長がいいました。

「85 パーセント以上とあります」

「それみるがいい。すぐ外交チャンネルを通じてだな・・・」

「ただし、とあります。ただし似ている現象として、バードストライクをあげています。速度こそ遅いもののよく似ているとあります」

「鳥はマッハじゃ飛べんぞ」

参謀総長が吐き捨てるようにいいました。

「大統領、悪いお知らせです。今回のシンドロームで初めての死者が出ました」

補佐官が今、届いたばかりの報告を大統領にしました。

「どんな症状でだ」

「大人が2名、本日、家のビルから飛び降りたとのこと」

家族が目を離した一瞬でした。

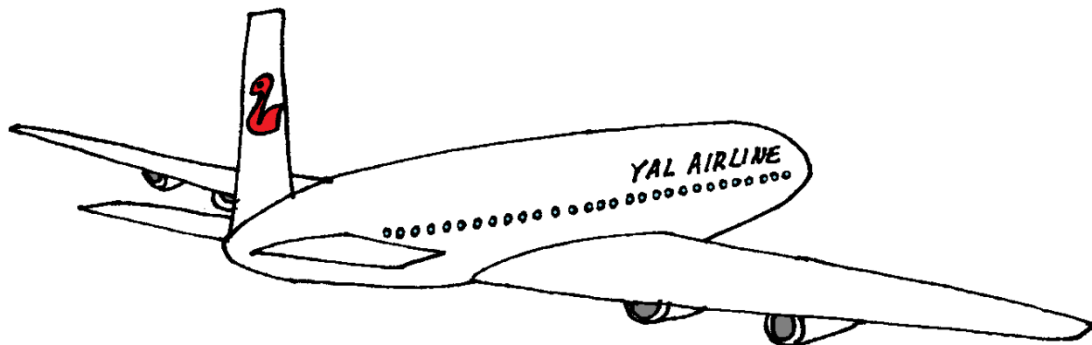
「自分は虫だ、鳥だとかいって、窓から飛び降りたということです」

「子供はいないんだな。子供は宝だ、絶対に死なせてはならん。もちろん大人ならいいわけではないがな」

別の奇妙な現象が民間航空機でも起きていました。

「Mayday (メイデイ)、Mayday (メイデイ)、Mayday (メイデイ)・・・
こちら YAL568 便・・・」

突然、首都の国際空港デザト・グレスに着陸しようとしていた、外国の民間機から、遭難信号が管制塔に入りました。



「どうしましたか？」

「こちら YAL107 便だ。後、着陸まで10分、高度1,000メートル、今、デザト砂漠上空を南から進入するところだ。まったく操縦桿が効かない。飛行はできるので、この姿勢で空港上空をつきぬけるかもしれない」

機長からは緊急連絡が入りました。緊急ではあるのですが、比較的落ち着いた話が管制官に届きました。

「旋回は可能か？」

管制塔は緊張が走りましたがすぐに対応しました。一切の着陸する航空機を高度 1,500 メートル以上に分散させる緊急行動を指示しました。

管制官が質問しました。

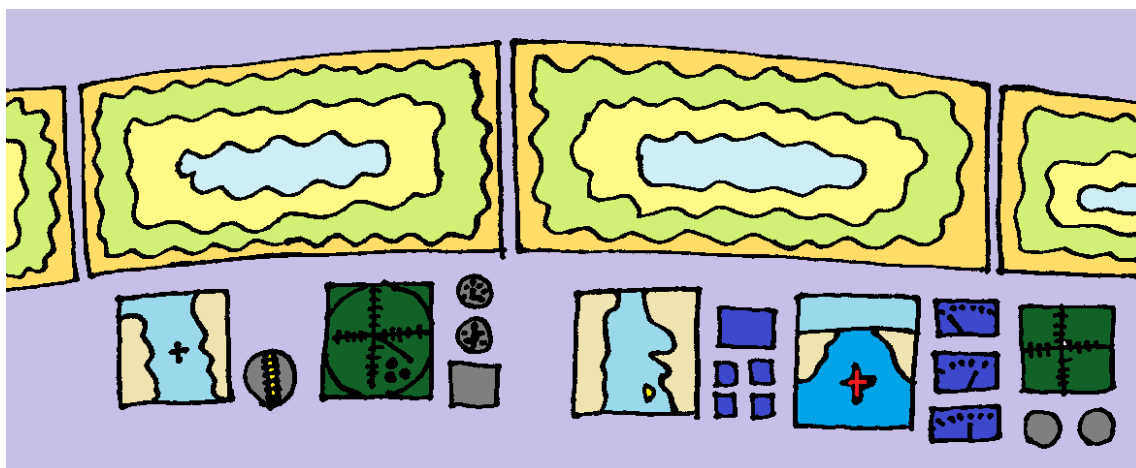
「無理だ、直進だけだ」

「機器の異常信号はこちらでは認識できない。その状況はどうか？」

「主翼のフラップ、エルロン、尾翼の異常ランプが点滅している」

「ほかに情報は・・・？」

「故障の前に急に目の前が明るくなった。まるでフラッシュライトを連続で浴びたかのような感じだった。何かそれが関係してるか？」



「まだ何もわからない、YAL568 便。あと 3 分で空港上空を通過するだろう。その高度でまっすぐ飛んでくれ」

機長はこの状況を乗客に説明し、航空機はグレス国際空港上空を通過しました。

「今、上空を通過した。乗客は無事だ」

「たった今、YAL568 便は上空を北に通過しました。ここからも肉眼でも見えます。無事なようです」

数分が経過した時でした。また機長から連絡が入りました。

「こちら YAL568 便、グレスを通過したが、今、操縦桿が戻った。異常ランプも全部消えている。これから旋回に入ろうと思う。指示をくれ」

「やった、YAL568 便は元に戻ったようです。」

「YAL568 便、今から指示を出す・・・」

YAL568 便の異常行動は、すぐに大統領緊急会議室にも連絡されました。合衆国全体に特に航空機、船舶には特別の緊急通報が発令されました。

大統領へ手紙を

「とうとう来ちゃったわね」

6 日前の日曜日でした。レタを中心にクラウシア、トナ、デコの 4 人がレタのテントの中でなにやらやっていました。

「なにしてるのかしら」

エイミーは中をのぞきました。

『だめだめ、みちゃだめだニ』

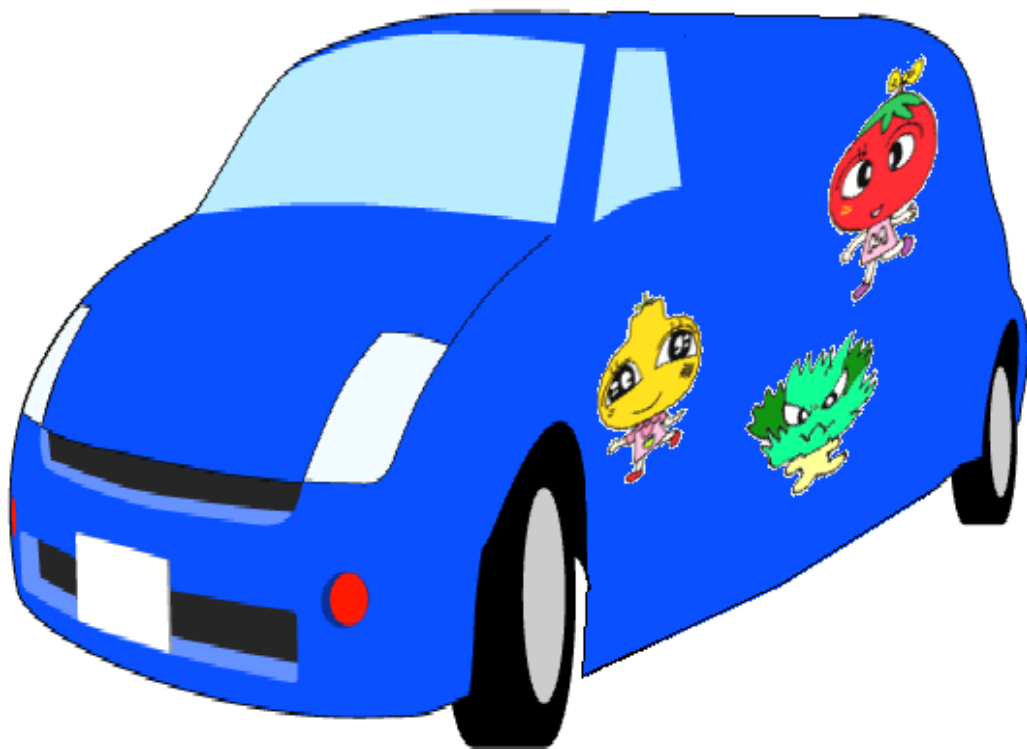
「ええ～～～どうして？」

『レタの秘密情報だにゃん。1週間したら渡すにゃあ』

『エイミー、それまで待ってほしいデコ』

エイミーは少し心配になりましたが、テントの中には入らず、戻ろうとしました。

『だいじょうぶよ。だから今度の土曜日はがんばって行ってきてね』



トナが外に出てそう言ってくれました。こうしてエイミー、バーバラ、トミーの3人は6日後の首都デザト・シティ（砂漠の町）に、ジェームス・カナディ大統領に会うためにやってきました。マロン村のある州都ビッグ・ロックシティからバーバラの母親のオリオン先生が車で10時間かけて今、到着しました。

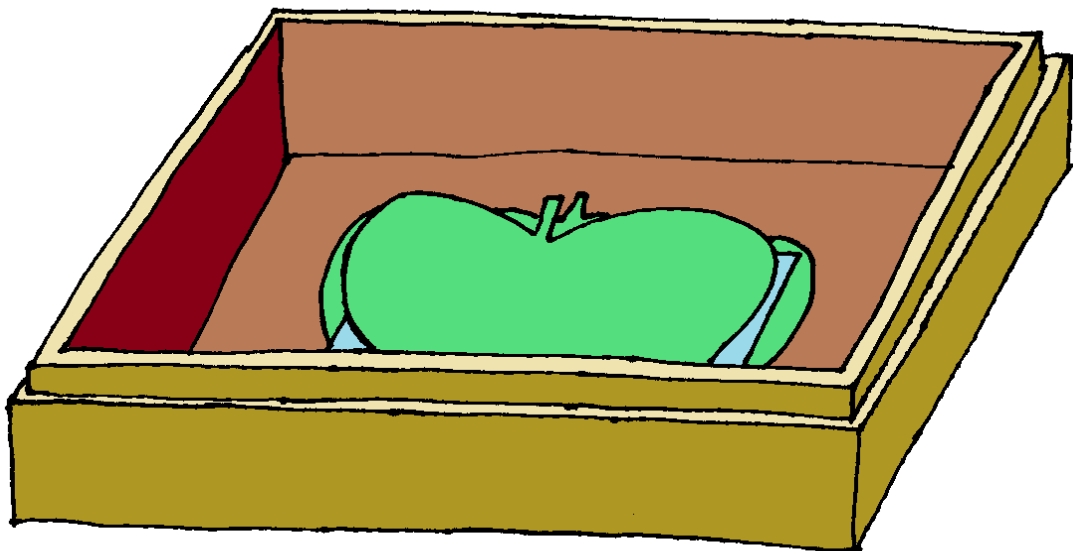
「でもさあ、レタ君の手紙をそのまま渡すんだろ。あのデカパンがはいっていたりして。おいら心配だなあ」

「でもデカパンはこれじゃあ入らないしね、エイミー、どう思う？」

「どう思うっていったって、このまま渡すしかないわよね。このテントウムシ君が監視してんだもん」

「オリオン先生の車もシール貼られちゃったしね。まあおいらは冷静に知的に話をするだけだけどね」

小学生が使うノートの大きさの便せん10枚くらいに何かいろいろと書いてあるようです。それを多くのハート型の葉っぱで合わせ、4隅をツルのようなひもでとじてありますが、1センチくらいある少し



大きいテントウムシで封がされています。エイミーはそれを小箱から取り出して言いました。

「あんたもごくろうさんね」

3人は今、大統領府の前にやってきました。門の前には拳銃を持った特別警備員が、厳戒な警戒にあたっています。

「こんなところに入れるの？」

「バーバラ、みんなにも言うわ。わたしは車の中で待ってるから、あなたたちだけでやりとげなさい」

オリオン先生はそうバーバラたちにいいました。バーバラはエイミーとトミーの顔を見て心配そうにしています。

「大丈夫だよ、きつとうまくいくよ。おいら、エイミーの後から付いて行くよ・・・」

エイミーはかばんの中から、こころの木を1本取り出しました。

「これでやってみるわ。あとは神様にお願い・・・」

エイミーはひとりの門兵のところへ歩いていきました。



「この木を大統領に届けたいのですが」

「なに？その木を大統領にだって？面会票は？」

門兵の1人が、きつい口調でレタにいいました。

「面会票はこの木です。香りをかいでください」

エイミーはそういって、こころの木を門兵の顔に近づけました。

「おい、何をするんだ！」

その門兵が大きな声を上げたので、別の門兵が近づいてきました。

「どうしたんだ？」

「いや、こいつが、この木を・・・、オイ、いい香りだな。お前も



かいでみろよ」

「うん？なんだ、木の話か？・・・どれどれ・・・」

警備していた二人の門兵はこころの木の香りに、しばらく時を忘れたようにうっとりしてしまいました。

「おっ、いかんいかん。で、用件は何だったっけ？そうか大統領に面会だったな？」

「入ってもいいのかしら？」

「トーゼン、いいのだろう！どうだい相棒？」

「もちろん、入ってもいいだろう！」

エイミーたちは大統領府に入ることを許され、門の中に入っていました。少し歩いたところで、後ろを見ると門兵たちが手を振っています。

「どういうこと？」

バーバラが不思議そうな顔でたずねました。

「トナさんが言ってたでしょ。こころの木はその香りをかぐと、相手の心が自分と同期するって」

「入りたいって思ったから、入れてくれたのね、エイミー」

「そういうことらしいわね、バーバラ」

「悪い人が使うと困るね、エイミー」

「こころの木が悪いこととわかると、悪用できないんだって、デコさんが言ってたわ」

「トミーのカンニングには使えないわね」

「おいらはもう勉強の鬼だからカンニングなんて無理だね」

こうして3人は本当に大統領のいる緊急会議室の別室をロックできました。

「誰ですか？」

一緒に待機している補佐官がいました。

「大統領にお渡ししたいものがあります」

エイミーがいました。

「なんだね！この忙しいのに」

補佐官は怒ったようにいました。

「こんな汚い木を？大統領に？」

「香りがいいですよ」

エイミーは補佐官の鼻の前に、
こころの木を差し出しました。

「うん？くんくん、本当だ、とてもいい香りだな。で、何の用事だったんだ？」

「この木を大統領にお渡ししたいのですが・・・」

「それは素晴らしいことだ。さ、こちらに入られい」

補佐官はドアを開けエイミーたち3人は部屋にはいりました。

「なんだね、君たちは？わたしに何の用だね？」



カナディ大統領は、少し疲れた顔で対応に出ました。

「この手紙には、今回のナメリア合衆国で起こっている病気の原因と対応が書いてあります。大統領閣下にお伝えするためにここに来ました」

エイミーは毅然といいました。

「人払いがいるかね？」

大統領は3人の子供なので適当にあしらおうと思いましたが、こころの木の子のせい、ただならぬ雰囲気を感じ、補佐官がいない方がいいのかたずねました。

「補佐官にもいていただいた方がいいですが・・・」

「そうか、補佐官、君もそばに来て聞いていたまえ。お、おいっ、



き、きみ・・・」

補佐官はすっかり酔っぱらってしまったかのようです。

「はっ、よ、よろこんで」

補佐官は、先ほどの香りの余韻が残っているのか、すっかり同期しているようで、にこにこして言いました。

「面会票もなくよくここまで来たね。よほど何か不思議な力があるのかな？」

「さすが大統領！その通りです。ね、バーバラ」

トミーが言いました。

「まったく、だまってなさいよ」

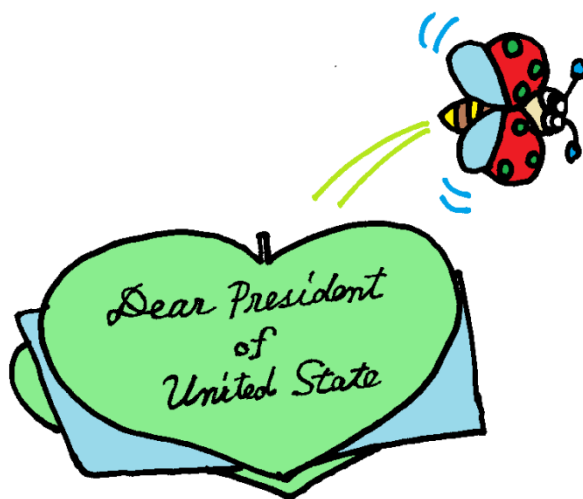
「この手紙をお渡ししますので、読んでください」

そういつてエイミーはさっきの小箱からハート型の葉にくるまれた手紙を出しました。テントウムシ君はその時手紙から離れて外に飛んで行ってしまいました。

「なかなかの雰囲気の手紙ですね、大統領。なんかうきうきしますなあ」

すっかり同期した補佐官は本当にうれしそうに、一緒に話を聞いています。大統領はエイミーの渡した手紙を見ていましたが、それをそのまま右手に持ったまま口を開きました。

「お、恐ろしい・・・」



大統領が小さくつぶやきました。そして1枚の手紙を3人の前に差し出しました。

「な、なにがですか？」

エイミーたちはびっくりして思わず声をあげました。

「あいつめ！！！」

見ると1枚目に【売ります！バイオコンピュータ！】と書かれ写真とその下に、【求む！縦しまの帽子！】とあり、トナ達4人がかぶっている写真が載っていました。

「・・・が、しかし・・・これが本当なら恐ろしいことだ」

大統領は再びいいました。

「パンツの次は何かな・・・？もうハラハラするわね」

バーバラが言います。

「補佐官、キミも読みたまえ」

大統領はそう言って数枚の手紙を渡しました。ここには次のようなことが書かれていました。



<病気の原因だにゃあ>

- ① 病気は心の病気だにゃあ。
- ② 原因はマインドウェーブの減少だにゃあ。
- ③ バイオコンピュータがそう言ってるからまちがいないにゃあ。

- ④ ヒューマンだけでなく草木や我々にも影響するにやあ。
 - ⑤ 対策はスピリアンを捲くことだにやあ。
 - ⑥ これで負のマインドウェーブを消していくにやあ。
 - ⑦ うまくいったら縦しまの帽子と引き換えだにやあ。
-

「補佐官、どうだにやあ、あつ、いやどうだな？」

「はっ、まことにそのようかと……。さっそくこの縦しまのパンツを用意しま……」

「いやそうじゃない。この今はやっている病気のことだ。報告では風邪と聞いているが心の病と言うではないか？」

「そのようすな。さっそくこのマロン村に調査団を出し報告させることにしましょう」

「そうしてくれ。ところでさっきから気になるんだが、どうして子供だけで来たのかね？」

大統領がたずねました。

「昔、宇宙人をやっつけたのが子供だったので選ばれたんです」

トミーが言いました。

「ハハハハ、それはおもしろいな。ところでさっきから手に持っている木は何かね」

「こころの木とお話しができる木です。大統領もお話してみますか？」

エイミーはこころの木に話しかけました。



「バラの香りを出しておくれ」

するとところの木からそれはそれはかぐわしい、バラの香りがするのではありませんか。

「おお、手品のようだね」

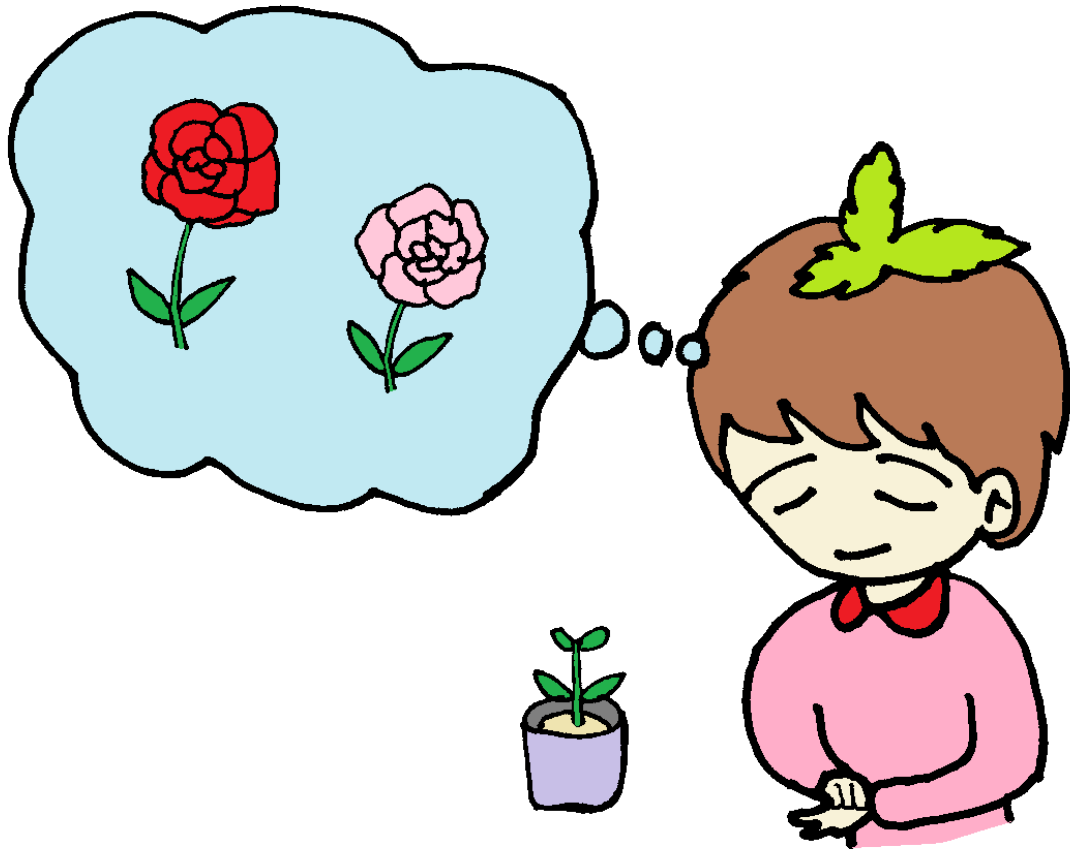
「さあ大統領も・・・」

大統領はなぜか疑うこともなく無心になって、思わずところの木を両手で抱えました。

「えー、そ、それでは、わたしのふるさとのオレンジの香りはどうかかな」

何も変化がありません。

「オレンジの香りをだしてください」



大統領は丁寧な言葉でいいましたが、何も変化がありません。

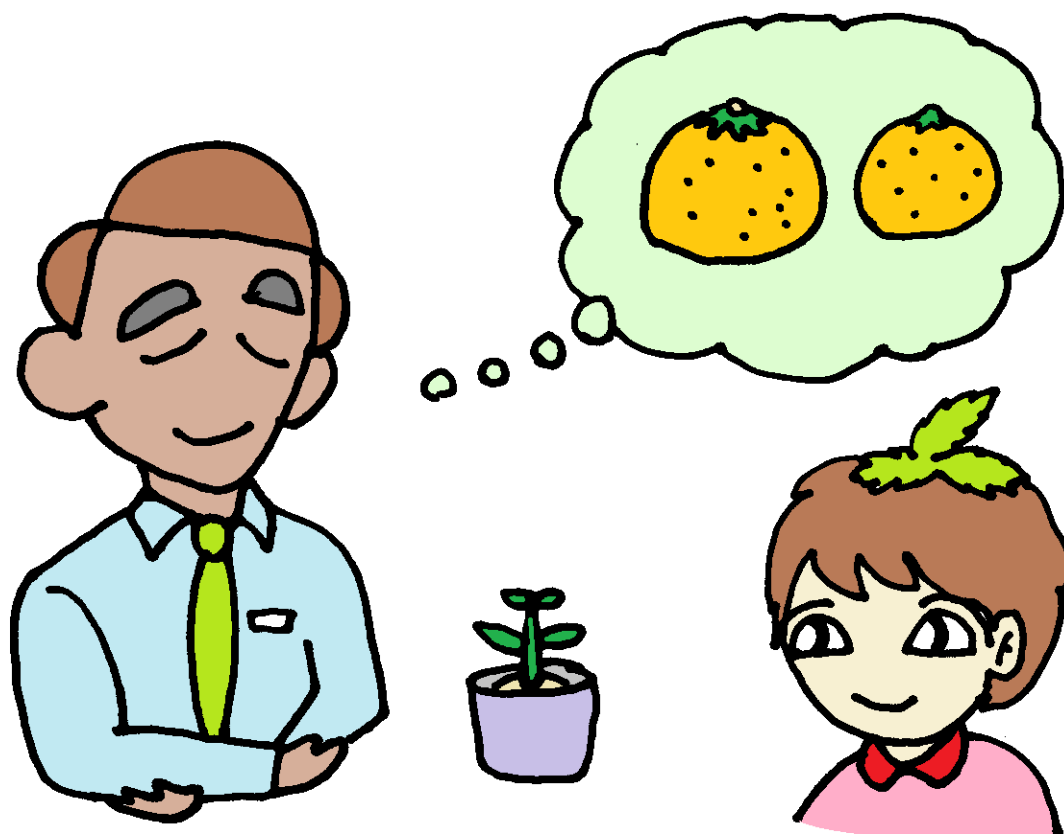
「手品でない証拠もお見せします。大統領はこころの木を持ったままにしてください」

エイミーは、大統領の持つそのこころの木のそばまで来ました。そしてささやくように優しく話しかけました。

「大統領閣下が、オレンジの香りがほしいそうよ。どうかな？」

するとこころの木は、さっきのバラの香りよりも強く、オレンジの香りを出すではありませんか。少し離れたところからバーバラが言いました。

「大統領、これは手品でも何でもありません。補佐官さんにも見ていただきました」



「補佐官、見ての通りだ。これは手品かね？」

補佐官はにこにこして体をゆすっています。まるで何かのリズムに乗っているようです。

「おい、きみ。補佐官！」

大統領は、大きな声でいいました。

「はっ、は、この者たちが大統領の面会に来ております、です……」

「それはさっき君から聞いて、こうして面会している。どうしたんだね？」

「あっ、はっ、何でもありません。ほっ、本当に素晴らしい木・・・
ですね」

補佐官はやっと元に戻ったようです。

「きみはもういい。はやくマロン村に調査団を出してくれたまえ」

【同期しすぎたのね】

エイミーは笑顔でつぶやきました。

「こころの木と話ができるように、大統領閣下にプレゼントします」

3人が帰ろうとしたところ、大統領があわてていました。

「君たちといつでも連絡が取られるように、緊急用の電話を用意させよう」

「大丈夫です。もしほんとうにあたいたちに連絡があるとすれば、そのときはこのこころの木に話してください。きっとあたいたちと話ができるはずですから」

「・・・こ、こころの木に・・・？」

部屋から出て行こうとした時に、大統領が質問しました。

「誰と話ができるというのかね？」

「大統領、よろしく」

外で待っていたバーバラのおかあさんのオリオン先生は、エイミーたち3人を車に乗せ、さっき来た道をまた帰って行きました。オリオン先生は何も言いませんでした。エイミーたち3人の顔には自然と笑みがこぼれていたのが安心したのでしょうか。



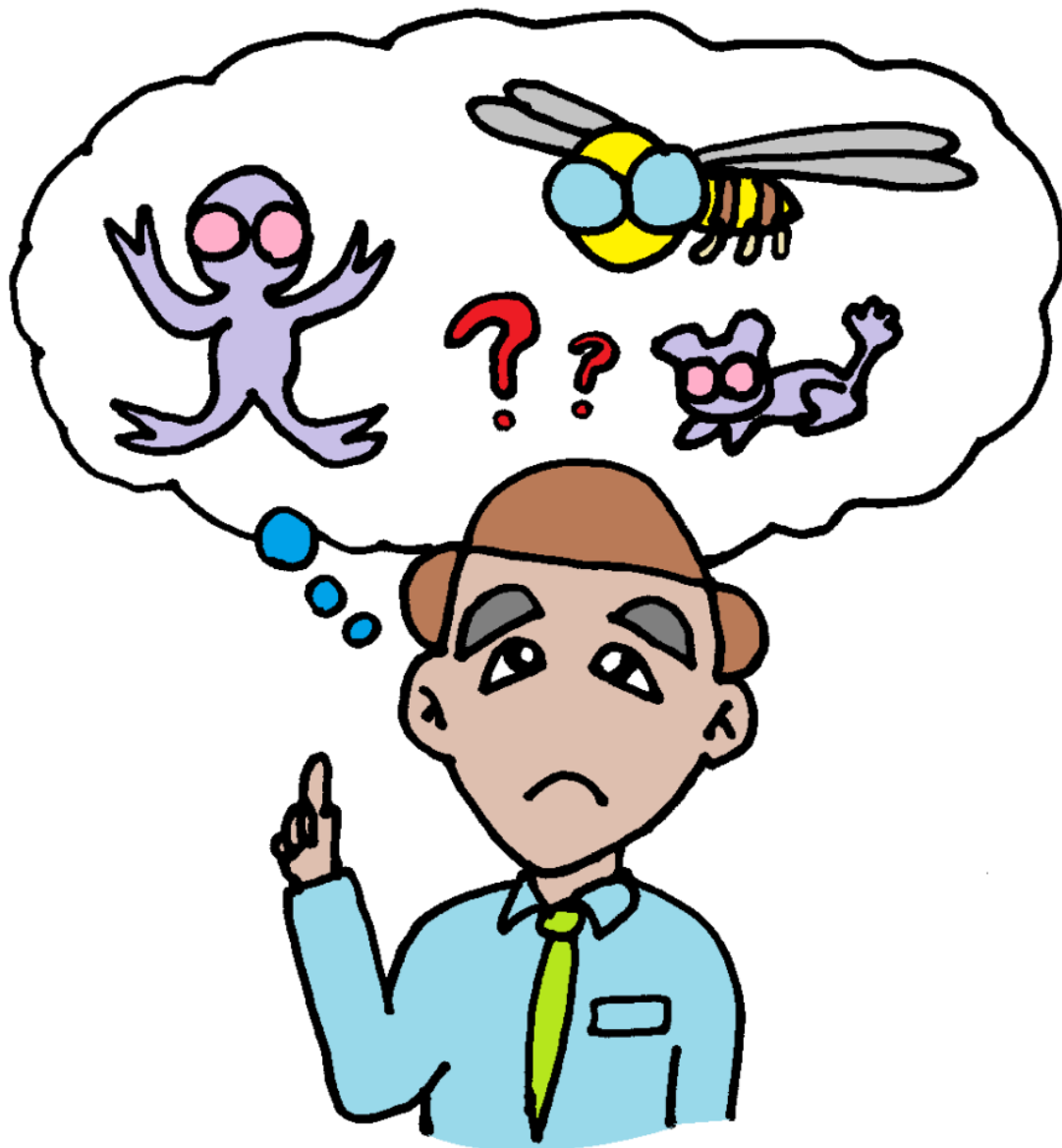
大統領の決断

緊急事態のさなかではありましたが、大統領は翌朝までじっとこの本を机の上に置いて、かたわらの手紙を何度も読んでいました。

【マインドウェーブの減少によりミツバチやバッタはデビルビーというものになってしまうにゃあ。集団生活で野菜に悪い影響を与える・・・か。なんかの謎解きのようなにゃあ、あっ、いや・・・のようだな？しかし、そのデビルビーとやらは、その後どうなるのだろうか？】

そのことについては手紙にはこう書いてありました。

『オレッチのワールドのレタの教科書には、悪いミツバチが悪い花粉を運んだとあるニ。その花粉がきっかけで病気が流行ったことがあったニ』



【どんな世界なんだろうね？そのワールドというのは？まさか平和で戦争も紛争もけんかすらないということはあるまいな】

大統領はレタの [バイオコンピューターの件]、 [クラウシアのスピリアンを捲く件] はともかく、トナの [エネルギーの 15%削減] はどうしても容認できません。

【それにしてもこころの木と引き換えに、合衆国のエネルギーを 15%削減させろとはな・・・】

実はナメリア合衆国のエネルギーを 15%減らせば、スピリアンの効果によるマインドウェーブ増加でちょうど帳消しになるクラウシアの計算です。大統領はおもむろにペンをとって、会議でまとめられた実行のための執行文書に追記をし、急いで補佐官を呼びました。もう陽も落ち夜の 8 時を回っていました。

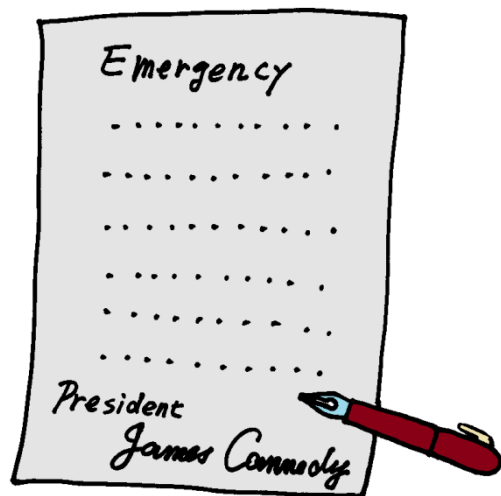
「すぐに参謀総長以下、軍関係者と、国務関係者の経済責任者らを集めてくれ」

「はっ、いつですか？」

「今すぐだ」

「はっ、すぐに召集いたします」

大統領はあくまで個人的な考えだとしながらも、その対策を指示しました。



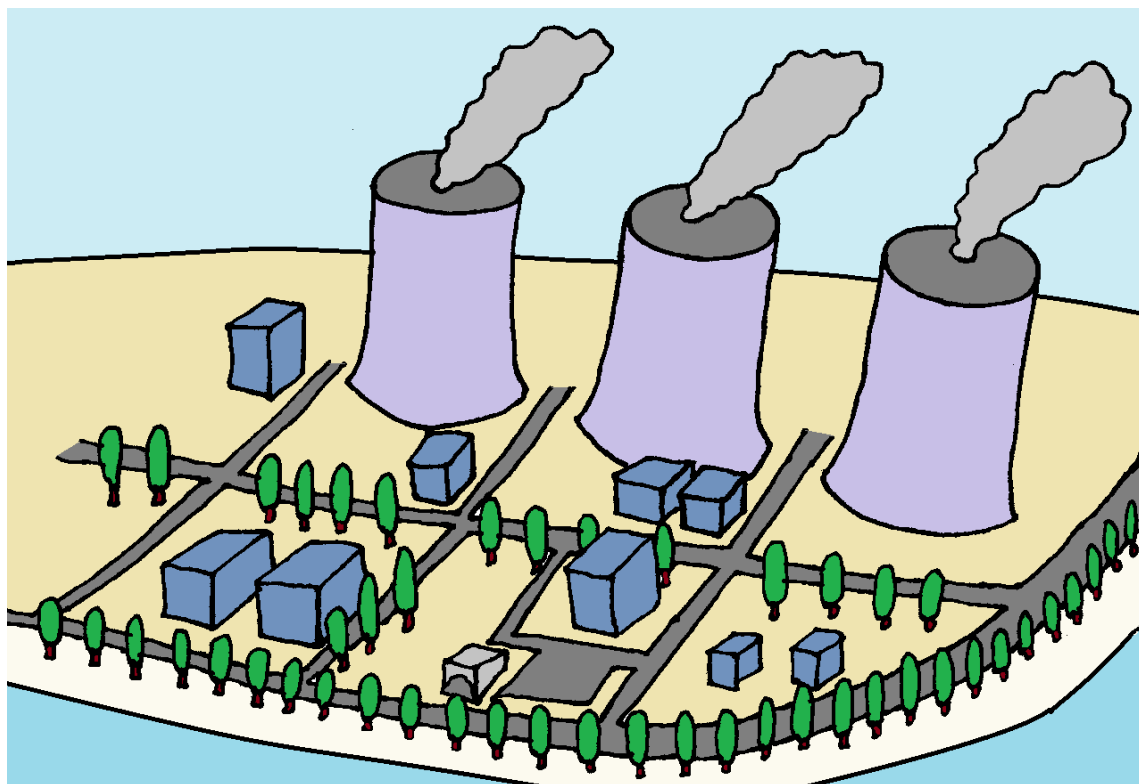
「今から話すことはとても信じられることではないかもしれない。しかしわたしも一国の大統領だ。決しておかしなことをいうつもりはない。また始めに申し伝えておきたいのだがこれは命令であり、一切の反論はないものとして聞いてくれたまえ。わたしの全責任を持って対応する所存だ」

一同に緊張が走っています。

「我が国での2つの出来事の1つ、奇妙な病気の対応であるが、先ほどわたしの元に伝令が来た。既に補佐官に薬を作るように指示した。安心してくれたまえ」

「伝令ですか？はて、誰が来たのだろうか？関係者は全員ここにいるのにな？」

「ま、参謀総長、それはいい。で、ちと難しいが発電所のエネルギーを15%削減する。エネルギー長官、それができるか？」



「はっ？15%ですか？急にはとても難しいと思いますが。それとその病気が何か関係するのでしょうか？」

「大いに関係する。それがやくそ・・・、」

大統領はトナとの約束といおうとして、あわてて訂正していいました。

「や、薬草だな。そ、その 15%が薬草のエネルギーに必要なんだ」

「はっ、それなら削減したら逆にできなくなるのでは？」

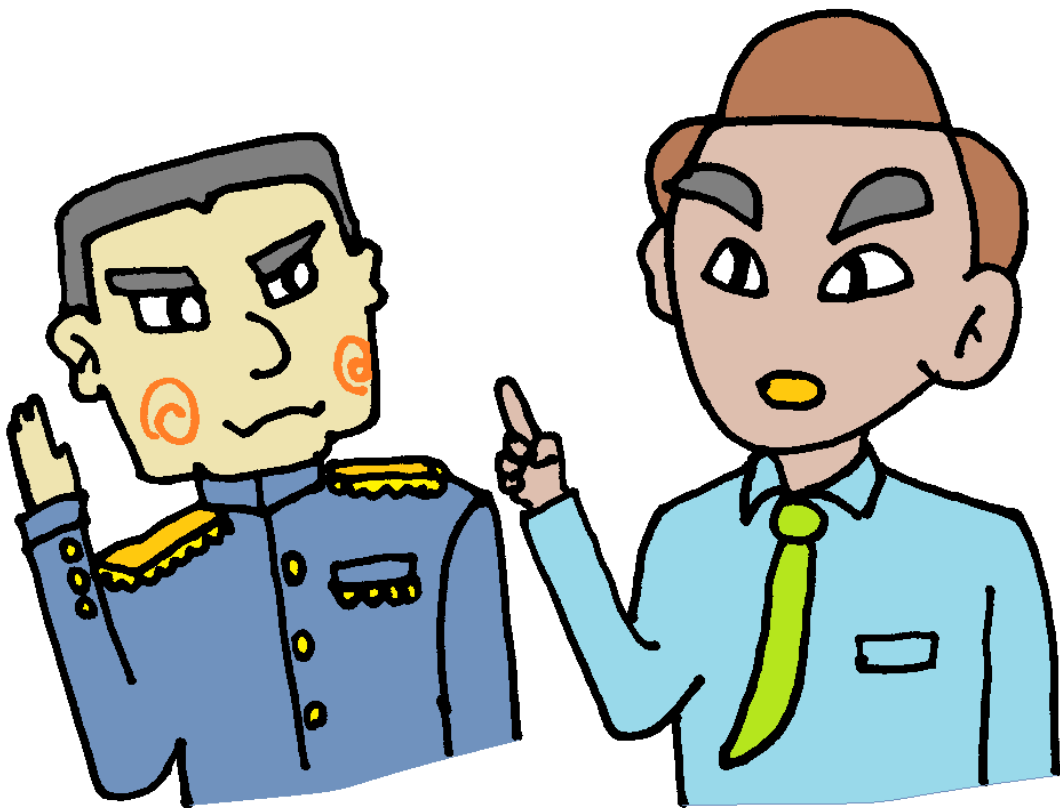
エネルギー長官がいました。

「と、とにかくだな、15%が薬草に回せるか、まず削減してみろということだ。わ、わかったかね、長官」

「はっ、十分に理解いたしましたので、さっそく実行に移します、です」

「それとな、補佐官。薬になる植物はアイムシュタインという人が、協力してくれるそうだ。補佐官から医薬品局長に伝えてくれたまえ」

「しかし、大統領！2つ目の戦闘機の墜落事件は敵国の軍事行為ではないかと、ますます疑いが出ております」



参謀総長がいました。

「仮想敵国の調査を急いでくれ。しばらく戦闘機の飛行速度を最大800km/時としたほうがいいな。マッハの飛行訓練は中止しろ」

「そのように全軍に指示させていただきます」

実際にトナトン王国の異常は、負のエネルギーがマイクロ次元を通じ、フレンズワールドに流出したことにより、トナトンのエネルギー異常が起これり危機になっています。しかしそのことは手紙には書くことができないので、最後にエイミー自身が書いた手紙を渡しました。

【わたしのお友だちがとっても困っています。みんなが病気になってしまっています。それはわたしたちが作る巨大なエネルギーのせいなのです。それがマインドウェーブより大きくて負の蓄積になり病気になるようです】

大統領はこれが一番気になるようです。大統領は手紙に中にあるみんなに話せないことを、自分なりの戒（いましめ）として紙に書いてみました。

【わたしの十戒(My Ten Commands)】

1. 健康な 体に宿る ボクの心
2. 幸せは お金で買えない どうしよう
3. 戦争は 戦争ごっこに しておこう
4. あまった 食事は もったいない (MOTTAINAI)
5. エネルギーは 自給自足で 節約さ
6. 自分に厳しく 人にやさしく 時には自分にごほうびを
7. ネバーギブアップ あきらめなければ 道ができる
8. 家族・友人・生命を大切に でも蚊と蠅はどうしよう

9. 生きもの皆、友人 でもゴキブリは嫌いだよ

10. しあわせ、しあわせ、しあわせになろう

【我ながらいい教訓ができたにゃあ・・・いや・・・できた二・・・
いや・・・なあ・・・】

大統領はその紙を自分の壁に貼って、決意を新たにしました。子供や見ず知らずのフレンズなるものも友人として手を差し伸べています。そのことを深く感じながら、大統領は自分の気持ちを10の戒め・教訓にしました。しかし、いかに世界一の超大国ナメリア合衆国大統領として、任期の決まった期間中の代表者です。1人の人間としては小さいのです。これを政策に移すとなると、国内、諸外国との交渉など、とてつもない長い時間がかかることも知っています。まずはこの危機を脱することを誓い、その十戒を深く胸に刻みました。

【とにかく、ネバーギブアップだ。あきらめなければ、生きていれば最後は勝つにゃあ、いや、勝つ！・・・どうしたんだ、オレ・・・】

